

菊と扇 ～〈黒書院〉四の間～

二の丸御殿の〈黒書院〉は部屋ごとに四季の花鳥や景物などが描かれています。今回は、秋の風情に満ちた四の間の障壁画をすべて公開します。四の間の襖や壁には様々な垣根に沿って咲き誇る菊が描かれています。一方、長押の上の壁は、風になびく薄を背景に大小様々な扇が舞い散る様子が描かれています。これらは長押の上と下で別の画面として展開していますが、いずれも秋の草花を描いているというだけでなく、中国や日本の詩や和歌等の文芸作品でも繰り返し取り上げられた主題でもあります。浮彫のように見える菊の花びらや垣根、さらに、一つとして同じようには描かれない46面の扇面を間近にお楽しみください。

寛永行幸と〈黒書院〉四の間

二の丸御殿は、寛永3年(1626)の後水尾天皇(1596～1680)の行幸に合わせて改修され、現存する重要文化財障壁画もその時に描かれたものです。〈大広間〉から〈蘇鉄の間〉を経て奥に位置する〈黒書院〉は、行幸の頃には小広間と呼ばれていました。文字通り〈大広間〉より一回り小さい建物で、公的な対面が行われる〈大広間〉に対して、〈小広間(黒書院)〉での対面は、高位の公家や大名などに限られていたようです。行幸の際には、〈小広間(黒書院)〉の二の間から廊下までが、天皇に従ってきた宮家、門跡、公家を饗応する場所となりました。下段である二の間は宮家や撰家、三の間は門跡、四の間は東の廊下(牡丹の間)とともに、「諸公家公卿殿上人」の席となりました。

籬に菊、流水

四の間は菊の間とも呼ばれていたように、長押の下に描かれた大小の菊に目が惹かれます。菊の花は、貝殻が原料の白の絵具(胡粉)を厚く塗り重ねて花びらが描かれており、浮彫のように見えます。垣根にも用いられているこの技法は盛り上げ胡粉または置き上げ胡粉と呼ばれます。菊は様々な垣根(籬)に沿って生えています。直線的な竹垣は、東西南北のすべての壁面に見られます。南側(正面に展示)の中央付近と西側の一番北よりの画面から北側にかけては(正面向かって右側に展示)竹垣に重なるように、竹と柴を組み合わせた垣根があり、北側の東よりの戸襖から東側の襖の中央付近まで大小の柴垣が描かれます(正面向かって左側に展示)。垣根は画面の最下部あるいは、金地の地面から立ち上がり、南側から西側にかけてと北側では地面の背後には群青の水辺が現れます。北側と東側では垣根の前後に緑の土坡が広がります。東側には土坡の上や周辺に根笹、竜胆、紫苑も見られます。

ただし、行幸の饗応など実際に部屋を使用する際には、出入りや採光の便宜のために、廊下に面する北側と東側の建具は取り外されたと思われる。そうすると、土坡や菊以外の植物は見られなくなります。残る南側と西側の壁面に描かれているのは、籬に菊と流水です。この三つの要素からはいくつもの和漢の文芸が連想されます。そもそも中国原産の菊は香草・薬草として、高潔の象徴や魔除けと捉えられ、9月9日の重陽の節句に長寿を願って菊酒を飲むという風習は、遅くとも前漢時代(B.C.206～A.D.8)には成立していたとされます。なお後水尾天皇の行幸の四日目が重陽にあたっており、大御所徳川秀忠(1579～1632)は、菊の造花を挿した白銀の手桶を天皇に献上しました。

重陽の風習は平安時代には日本でも見られるようになりました。そのころには、菊から滴った露が流れる水を飲んで長寿を得たという菊水の話や、菊を愛した中国の詩人陶淵明(365～427)も知られ

るようになり、日本の詩歌の題材となりました。菊水の話からは和歌だけでなく、鎌倉時代の天台宗の僧侶によって菊慈童の説話が生み出され、さらにその説話が取入れられた『菊慈童』や『枕慈童』といった能の演目が登場しました。菊とともに描かれている流水からは、菊水の話や菊慈童が、また、籬と菊からは、陶淵明の詩の一節「菊を採る東籬の下/悠然として南山を見る」が想起されたかもしれません。

風に舞い散る扇

長押の上には、風に揺らぐ薄を背景に大小合わせて46面の扇が散らされています。扇はすべて開いた状態のものが描かれています。扇の形は大きく二種類に描き分けられています。扇面の折り目(山/谷)を示すものと、折り目を示さず扇面の上部がきれいな円弧を描いているものです。前者は扇の骨が10本であるのに対し、後者は12本から18本で、中でも15本のものが多くなっています。能の世界では、シテ(主役)とワキ(脇役)、またシテやワキの助演役であるツレが持つ中啓は骨が15本で、囃子方などが持ち、仕舞などに使われる鎮扇は10本となっているそうです。12本以上の扇がすべて中啓かどうかは不明ですが、意識的に扇の種類を描き分けられているのは確かでしょう。また扇の骨の色も、赤、緑、褐色、黒を単一で用いるだけでなく、様々な組み合わせで塗り分けています。

扇面の絵は、同じ図様の一つとしてありません。地色は金、群青、砂子蒔き、素地等が見られ、その上には、花鳥草木から水墨山水、大和絵の景物から紋様に至ります。興味深いことに、扇面にも籬を描くものも合計7面もあり、長押の下の籬に菊図とよく似た籬に秋草を描く扇面もあります(正面に展示)。

ところで背景に描かれた穂の出た薄は、秋であることを明示しています。「秋の扇」とは、扇が必要とされる夏を過ぎて、もはや不用になりつつあるものです。この主題は、皇帝の寵愛を失った我が身を秋の扇に例えたとされる、前漢の後宮の女性、班婕妤(B.C1世紀頃)の故事が大元ですが、やはり和歌などの主題となり、室町時代(1336～1573)には世阿弥によって『班女』という能の演目になりました。

長押の上下ともに能の演目を連想させる画題となっていますが、既知のように能＝猿楽は祝いの宴に欠かせないものとして戦国武将たちに愛好され、徳川将軍家はこれを保護し、式楽としました。二条城でも、家康(1542～1616)以来、たびたび猿楽の宴が催され、上述の行幸でも、四日目に猿楽が行われました。その日の演目には『菊慈童』も『班女』も含まれていませんが、〈黒書院〉四の間の障壁画は、和漢の文学的素養を持つ当時の公家や上級武家に、能の演目を含め、さまざまな文芸作品を想起させたことでしょう。